# 悔しかった箱根駅伝予選会（それでも、我が青春に悔いなし）

11期　赤羽益三

防衛大学校陸上競技部創部50周年、防衛大学校とともに歩んだ半世紀、その歴史の１コマに存在した者として誠に喜ばしい限りです。

我々11期生が小原台のグラウンドを駈けずり回ったのは昭和38年（1963年）春から昭和42年（1967年）春までで、防衛大学校陸上競技部時代は正に我が青春であり、色々なことが懐かしく想い出されます。11期生全員、現役自衛官を終え、ちょうど還暦を迎えたところです。各人、陸上競技に係わり合い陸、海、空自衛官としての任務を立派に果たしました。

防衛大学校陸上競技部時代、一番印象に残っているのは、４年生の時の箱根駅伝予選会です。５期、７期に続いて箱相駅伝出場が期待された11期は「箱根の山を登れ」を合言葉に川畑君を中心として練習に励んでいる姿が想い起こされます。結果は、その当時の強豪の慶応、立教大学を下したのですが、僅差で次点でした。この予選会で、今では箱根駅伝等でその名を馳せていますが、我々が予想していなかった神奈川大学が本選出場を果たしております。当時の我々は神奈川大学にやられたという印象を持ったものです。

ここで、私が強調しておきたいことがあります。11期の陸上競技部の人数は14名ですが、それでも高校時代からの陸上競技の経験者は短距離、投擲専門の私だけです。１年生当時は2000mでは私が一番早かったと記憶しています。（このことを私が自慢しているのでは、ありません。）箱根駅伝に出場する大学の選手は当時でも高校時代、インターハイ出場者か、少なくとも県内の駅伝等で、名を馳せた連中ばかりです。以上のことから経験がなくとも、４年間の精進によって箱根駅伝に出場できる程の実力がつくのだということを現役学生は肝に銘じて欲しいのです。

前述のとおり、11期の勢力は14名ですが、ほとんど退部者もなく、当時としては段突の人数です。人数だけでなく、それ相応の活躍もし、成果を残したと思っています。先輩期では、どちらかというと長距離陣が充実し、短距離陣は従的な存在でしたが、我が11期以降それぞれの部門が更に充実しバランスのとれた陸上競技部になったのではないかと自負しております。

最後に重ねて、創部50周年をお祝いし、これを契機に現役学生諸君の新たなる活躍を心から願い次の節目に向けて更なる躍進を祈念しております。







# 50年史によせて（土屋主将と鈴木マネージャーの思い出）

12期　清　水　明　徳

防衛大学を卒業して、37年という年月が経過した。その時間の長さは、学生時代の色々な出来事についての記憶を薄れさせてしまうのに十分な時間だ。

頭のボケも手伝ってか、あまり多くのことは思い出せない。

普段は、意識の奥底に埋もれている記憶を引っ張り出そうと、思いを巡らすと、出てくる想い出の殆どは、小原台の、あのグランドで練習している仲間の姿であり、その表情だ。スタート練習で、アドバイスしてくれる先輩の真剣な顔、インターバル練習で、全身で喘いでいる後輩の苦しそうな表情。夕暮れのグランドで、部員を、激励している卒業した○○先輩の顔、グランドホッケーの硬い球を足に当て、頻りに謝っているホッケー部員の顔が、仲の良い同期生の顔で出てくる。

いろんな顔が、断片的な思い出に浮かんでくる。

不思議なことに、よく見ると、その顔が、当時の若者の顔でなく、今の、60歳近い親父の顔として出てくる。

しかし、その中で、いつ思い浮かべても、若いときの顔のままで、浮かんでくる男が二人いる。それが、12期のキャプテンの土屋君とマネージャーの鈴木君だ。

二人とも、いまは故人だ。今回の投稿依頼を受けたとき、当時の思い出として、真っ先に、脳裏を横切ったのは、彼らのことだった。

土屋君も鈴木君も、高校時代に、陸上競技を専門的にやってきた学生ではなかった。

二人とも、防衛大に入学して、陸上競技というものに、初めてチャレンジした組である。

その二人のことで、記憶に残っていることがある。

1年生当時、土屋君に、「どうして、陸上部に入部したのか」と尋ねたことがある。

「走るのは好きでない。得意でもない。走ることが不得意だから、自分のために、挑戦したい。」彼から、そんな主旨の返事が返ってきた事を思い出す。

土屋君がブレイクしたのは、2年生の春だった。当時の新しい種目の「競歩」へのチャレンジである。これが見事に実を結び、競技のたびに記録を更新し、第1人者に成長した。思い出の中の彼は、華々しく活躍した「競歩」時代よりも、長距離グループの最後尾を黙々と走り続けていた時の方が、強いイメージで残っている。

それは、常に変わらぬ「ひたむき」な姿である。

マネージャーの鈴木君は、本当に、まじめな青年だった。彼は、フィールド競技（走り幅跳び）の選手としても活躍し、その練習のかたわら、我々部員のために、マネージャーとしての仕事を買って出てくれた。彼は、見事にそれらを両立させたのである。

彼は、それ以外にも、軍事史研究という文化部活動にも取り組んでいた。

いわゆる「マルチな活動」振りである。

マネージャーの鈴木君の印象は、すべてに対する「全力投球」である。

二人とも、「その短い人生を精一杯生きた。」というのが共通の印象だ。

彼らの生き様は、私自身の意識の底に、青春の可能性に挑戦する姿として、いまでも、残っている。

50年史出版に寄せて、短い人生を精一杯生きた12期生の主将とマネージャーの思い出を紹介しました。





# スピード競争時代に向けて

13期　弘田雅数

防衛大学校陸上競技部創部50年まことにおめでとうございます。

ここまでご指導いただきました諸先生をはじめ多くの学校職員の皆様に感謝申し上げます。

我々13期生が防衛大学校の門をくぐりましたのは東京オリンピックの翌年、昭和40年春でした。

多くの諸先輩方と同じく、我々13期生も中学・高校時代に陸上競技を経験した学生は１人もおらず、素人同然の我々の競技力向上は先輩の指導のもとの練習が頼りでした。当時は箱根駅伝への出場が大きな目標でしたが、我々が４年生になりました昭和43年当時の箱根駅伝出場を競う大学の状況は駒沢大学、亜細亜大学、大東文化大学等、後年箱根駅伝で優勝あるいは上位に食い込む大学がメキメキと力をつけている時期であり、予選会は持久力に加えスピードの競争になりつつありました。

これらの大学と競えるだけの走力を付ける方法として、トラック競技でのスピードアップが有効ではないかと考えました。

その様な時、上智大学から43年春に合同合宿を防衛大学校の構内で実施したいとの申出がありました。上智大学はユニバシアード国際大会800mに出場経験を持つ学生も在籍しており中距離では当時関東２部校ながら立派な成績を納める大学でした。合宿では練習に新風を吹き込むことができ、じつに実りの多いものになったと今でも思っています。

夏合宿は長距離陣が日高学生を中心として長野県の白馬村で箱根駅伝の予選会に備え、また投てき・短距離陣は校内で、そして競歩は多くの大学との合同合宿で翌年の競技会に備えました。

残念ながらトラック競技の強化が箱根駅伝の予選会通過というところまでのスピードアップにストレートには結び付きませんでした。しかし後年後輩諸君の20kmのタイム向上あるいはトラック競技における素晴らしい活躍を見るとき、我々の試みとそれを引き継いでいただいた後輩諸君のお陰で防衛大学校の陸上競技部の新しい発展に十分とは言えないまでも、いささかの貢献をしたのではないかと考える次第です。

部運営に協力していただいた13期生は以下のとおりです。

長距離は現在でも30kmの防大記録10傑にその名を残す日高民樹学生、粘りの秦政寛学生、つらいこともつらいと言わない山村繁夫学生、３年生の後半からの入部ながら立派な記録を出していた伊藤秀二学生が、競歩では12期生の故土屋健一先輩の実績を引き継ぐ後藤英二学生が、また投てき種目ではマネージャーを兼ねた木田学生に協力していただきました。

先生がたのご指導はもちろんですが、これら同期生の協力、また後輩諸君のご支援のお陰で部を運営できましたことに深く感謝申し上げます。

最後になりましたが、防衛大学校陸上競技部の今後のますますのご発展を切に祈念しております。







# 防衛大学校陸上競技部創部50周年にあたり

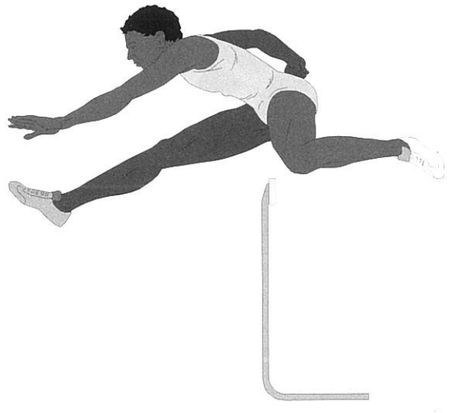
14期　斎藤　隆

防衛大学校陸上競技部創部50周年まことにおめでとうございます。私は横須賀高校陸上競技部の出身であります。高校では幅跳び、ハードルをやっていましたが。当時の横須賀高校は全国クラスの選手がゴロゴロいる競技部でありました。そんなに素質のない私ではありましたが先輩に刺激されてかなりハードな練習をしたおかげで何とかインターハイ全国大会まで出場することができました。そんなことで防大に入ったら陸上はするつもりはありませんでした。しかし当時鬼より怖い４年生からの「優しい声」と「ジャージの贈り物」（実際は後でしっかりと徴収されたのだが）という接待攻勢を受け簡単に宗旨替えして入部してしまいました。

当時の陸上部といえば私の感じではどうみてもマラソン部でありました。陸上を英語ではトラック＆フィールドと言うと思いますが、フィールドの選手はほとんどいないという現状でありました。そのおかげで「幅跳び」というのは、怖い先輩もいませんし、学生舎から逃避するのには最高の種目でありました。そのうち学年が進み400mから800mの選手がぼちぼちと出てきて、一人一人の選手の力はそれほどではありませんでしたが平均していることで1600mリレーではそれなりの成績（？）を収めることができたと思っています。４年生になって主将としての思いでは国立競技場での試合の後でありました。試合の結果は全然覚えていませんが、当時は学生運動が激しい時代であり競技終了後品川駅構内を制服でゾロゾロと歩いている時です、全学連の火炎瓶と投石に巻き込まれそうになりました。責任者として皆をどの様にこの場から巻き込まれないように帰校させるか冷や汗をかいたことを思い出しました。

頭の奥にしまってあった、埃をかぶったフロッピーから思い出を読み出してみました若干私事にわたってしまいますが、慶事に免じてお許しください。

現役の諸君「勉学」「学生舎生活」「クラブ活動」いずれも大事です、そして恋に悩むこともあるでしょう。１日は24時間限られていいますが、そのなかで全力をもってすべてにぶつかっていく、この過程に全人格教育、防大教育の真髄があるような気がします。





# 私の防大陸上部

15期　相馬　不二夫

「防衛大学校陸上競技部50年史」の発刊を心からお祝い致します。

私たち15期生は、この平成17年をもって全員が定年退官を迎えました。この節目の時期の発刊にOBとして大きな意義を感じています。

私たちが入学したのは、11期生が惜しい成績で３回目の箱根駅伝の出場を逃した翌年でした。そんな時期ですから、もう少しで出場に手が届くとの希望があり、毎日結構厳しい練習だったことを記憶しています。

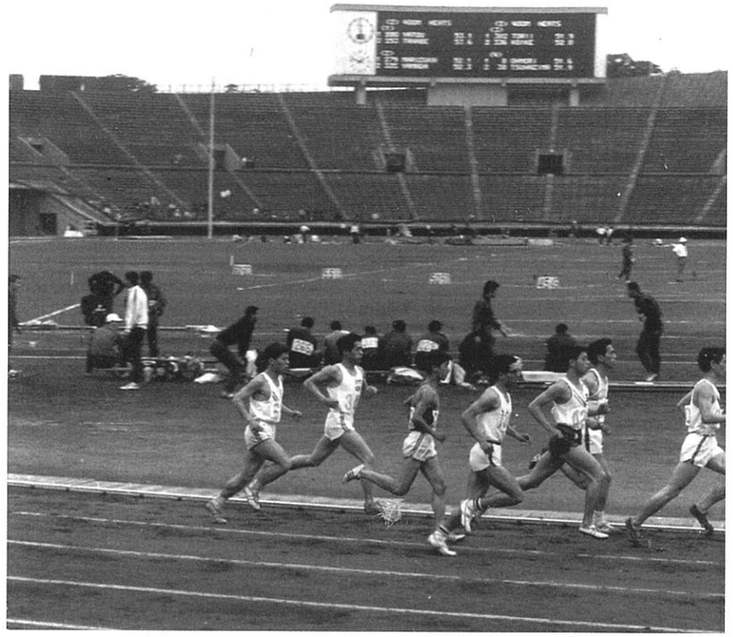
残念ながら私たちは、大した記録を残せず卒業しましたが、思い出に残っているのは、「神奈川７大学対校戦」の当番校として、大会運営で苦労したことです。外出等の制約で他校等との連絡に制限を受けていた私たちは、他校の学生や監督等の支援・協力を受けながら、主務の佐藤くん（陸）の頑張りで大会を準備・運営するとともに、江藤君（16期）や小森君・坂田君（17期）達後輩の素晴らしい活躍で、新校長の前で胸を張れたのを憶えています。

そんな思い出がある私は、後輩が創刊した「走・跳・投・歩」で、現役学生の活躍の記事を見るのを楽しみにしていました。今回廃止になり寂しい思いをしていましたが、先日インターネットの「ホームページ」を拝見し、新たな楽しみを見つけました。今後多くのOBが楽しみに見ると思いますので、更なる充実を期待しています。

私は、これまでに多くの先輩や後輩に出会いましたが、その中には、卒業後も指導者や現役ランナーとして活躍されている方や市民ランナーとして楽しんで走っておられる方を見てきました。私自身も、同期の大中君達と、３尉任官時に、富士山を一周（約100km）したこともあり、今も市民ランナーとして大会に参加しています。

現役諸君は、「今、強くなる」ことで頭の中が一杯だと思いますが、卒業後も、競技を続ける他に、指導者になることや市民ランナーとして走り続けることも出来ます。陸上競技を一生続けられるスポーツとして頂きたいと思います。







# “宝”になった夏合宿の思い出

16期　江藤文夫

ブワーン！グランドの端から鉄の塊が空高く舞い上がり、グランドの反対側に落下した。70メートルくらいは十分に飛んでいる。すでに他の選手は練習を終わりグランドを後にしかかっている。グランドの片隅、鉄の柵で覆われたサークルに筋肉の固まりのような選手がいる。彼が投げたハンマーであった。筋肉マンの名前は室伏重信、当時、日本記録を持ち、アジア屈指、そして世界にも通用するハンマー投げの選手である。

その室伏選手が所属していた大昭和製紙陸上競技部が合宿しているグランドで、我が防衛大学校陸上部もともに合宿し、投擲グループは、14期生の奥村学生を長として練習したのである。なぜこのような機会が与えられたかは定かではないが、大昭和製紙で陸上競技部を担当していた部長さんの息子が、たまたま防衛大学校の学生であって便宜を図っていただいた、という話を聞いたことがある。いずれにしても、日本の超一流の選手を目のあたりにして最初の印象は、“怪物だ！”であった。

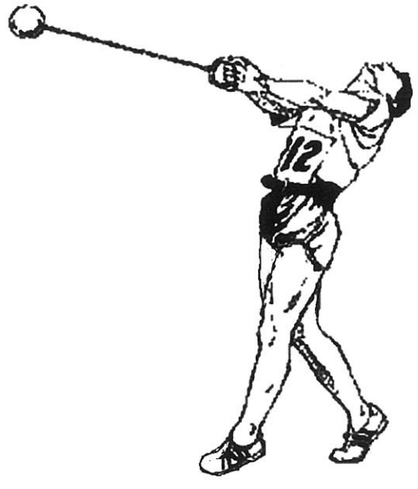
室伏選手の練習を見ていると、実際にハンマーを投げるのは、練習の最後に少しだけ。その他の時間は、ダッシュをしたり、三段とびをしたり、鉄棒にぶら下がったり、と瞬発力、跳躍力、筋力をバランスよくつけるための練習に終始していたように思う。室伏選手がハンマーを投げると、グランド全体が危険な区域になるため、他の選手の練習が終わってからでないと投擲練習をはじめられないという事情もあったのであろう。

そのような練習の合間、高校時代から憧れの、その、室伏選手から、ほんのチョットの時間であったが、指導を受けアドバイスをもらった。非常に丁寧であったが、それぞれの能力をしっかりと見極めた教え方であったように記憶している。

そんな室伏選手も、何回かオリンピックに挑戦したが、残念ながらメダルには手がとどかなかった。当時はまだ独身であった。その後、同じ投擲の選手（北欧）と結婚し、息子さんが誕生したということは新聞か何かで読んだ。「カエルの子はカエル」というが、室伏ジュニアは、アテネオリンピックに出場し、ハンマー投げで見事金メダルを獲得した。「怪物の子は超怪物」であった。

こんなことをいろいろと思い出しながら、昨年はアテネの室伏ジュニアを応援した。いまだに1969年の夏合宿の思い出は、私の“宝”である。

（2005年５月25日　別府にて）









矢印が室伏選手

# 17 期 の 挑 戦

17期　小 森　遵

17期が防衛大在籍の頃の陸上部は、全パート併せて幽霊部員含め30数名であり実質20名強が練習している状態でした。各パートは大きく短中距離、長距離、競歩、フィールドであり、長距離を除けば細部の各パートは１～３・４名の練習風景でした。練習は厳しくもあり楽しくも有りの和気藹々の雰囲気であり、気分転換ができる場でもあったと思います。

土のグランドは排水能力が低く水溜りが良くでき、大雨の時は田んぼ状態でした。雨上がりの後は整地とライン引きの作業をよくしました。

大会は、関東IC、神奈川七大学対抗、神奈川選手権等で、夏休みまでにほぼ終わり長距離パートだけは11月の箱根駅伝予選会に臨むという状態でした。理工系大会には申し込みできず参加させてもらえない状態でした。

３年後期からは「勝ちに行く」ということでかなり厳しく練習し、各種記録会等にも積極的に参加したと思います。毎日がクラブ活動を中心に廻っていたと思います。

秋の箱根駅伝予選会終了時には「次年度の箱根駅伝予選会は全パートで取り組む」宣言をしました。

最大の大会である関東ICは、400M（１位）、800Mを中心に国立競技場で活躍し、総合得点20数点で二部校６位入賞を果たし表彰台に登ることができました。当時の関東ICの防衛大の得点源は「競歩」でしたが、この時には３点に止まったのが残念でした。この時の二部校の１位は駒大、東海大が60数点で同率でしたが、400M×４リレーで防衛大が最後逆転で２位に食い込み、規定により１位駒大が一部昇格、３位東海大が二部残留となりました。東海大からは文句を言われましたが、防衛大陸上部の意地を示した痛快な出来事でした。

箱根駅伝予選会の練習は夏からフィールドパート等を除く全員で開始しましたが、とにかく大変でした。平日小原台を下って久里浜方面へのロングランでは、長距離パートから離され、夕食時間を気にしつつも何せ実力がないものですから辿り着かない日々でした。短距離の選手は更に大変だったと思います。（某部員は100M～20KM担当）どうにか、11月を迎え、起伏のある八王子のコースに臨みました。私のレースは前半抑えたつもりでしたが、15KM過ぎでガス欠状態となり、相当抜かれて苦しみながら辿り着きました。防衛大チームはエースの坂田、金子君は順当に走りましたが、全般には余り振るわなかったと思います。全員到着後その総合タイムから結果をあまり期待していませんでした。が、結果を聞いて残念！予選会第７位だったのです。６位の明治大学との差は37～８秒、10人で割ると３～４秒／人の小差です。私一人でも15KMからの30秒はほんの少しの距離、頑張りが足りなかったと悔やまれました。兎にも角にも、全員で頑張った箱根駅伝予選会でした。

その他、神奈川七大学対抗は、輪番制の担当であり、マネージャーの相当の頑張りを得て実施できました。又、総合得点を稼ぐ為に全部員が可能な限り複数エントリーし、１種目３名、１人３種目目一杯の申し込みをしたものです。競技の連続は当たり前でしたが、800M決勝ー200Mジョッキングー即200M決勝は厳しかった。初めてハードルを跳んだ人もいました。今となっては楽しい想い出です。

17期の頃は、100M～箱根まで何でも有りの時期でした。組織として個人として何にでも挑戦でき、各人の可能性をそれぞれ追求したと思います。



# 青春の回想（3つの挑戦）

18期　沼沢　満

30数年前の過去を振り返りながら改めて記憶をたどってみると、私の陸上競技部員としての４年間は、「挑戦」の連続であったように思います。

高校時代に走り高跳びをやっていた私は、大学に進んだら陸上競技以外のスポーツをやろうと思っていました。県大会では優勝しましたがインターハイでは予選敗退し、力の限界と同時にある種の満足感も感じていたからです。ところが防大入校直後に15期の久楽さんから、「沼沢君、君はもう既に関東学連に登録をしているから」と言われ、防衛大学というマークの入ったジャージを手渡されました。自分の思いは別にして陸上部への入部は決まり、成り行きから私の挑戦が始まりました。

第１の挑戦は背面跳びへの挑戦です。私が入校した1970年は、２年前のメキシコオリンピック男子走り高跳びで金メダルを獲得したフォズベリーの衝撃的な跳び方すなわち背面跳びが主流になりつつある時代でした。正面跳びに限界を感じていた私は、背面跳びならば記録を伸ばせるかもしれないという期待を持ったのです。しかしながら当時の高跳びの練習はトラックの外側にあった走り幅跳びの砂場で行っており、とても背面跳びができるような環境ではなく、まずはピット作りから始めなければなりませんでした。幸いにも、第１と第２コーナーの内側に野芝がびっしりと生えている高跳びのピットらしい形跡だけはありましたので、野芝の剥ぎ取りからピットの整備に取りかかりました。野芝を剥いだ後の土は、とても助走や踏切ができるような状態ではありませんでしたので井坂先生に頼んでゴム製の助走路を購入して戴きました。また体操部が使うスポンジのマットも購入して戴きました。ピットの整備と併行して陸上競技マガジン等を見ながら見よう見真似で背面跳びを始め、自分一人でも大会に出場して経験を積みました。４年間で公式記録は高校時代の記録を５cm更新しましたか、もう少し伸ばせる力はあったと今でも思っています。

第２の挑戦は十種競技への挑戦です。

４年時の部の目標は二つあり、その一つが「関東インカレ総合６位入賞」でした。総合６位に入るためには、活躍された17期の方々の得点分を稼ぐ必要がありました。私は専門の高跳び以外でも何とか点数を取りたいという思いがあり、今思えば無謀に近いのですが十種競技に挑戦しました。ハードルや槍投げ等は経験がありましたし、走る方も何とかなりましたが、棒高跳びだけは短期間で修得できるほど易しくはありませんでした。私にとって４年生の時の関東インカレが最初にして最後の十種競技出場でした。





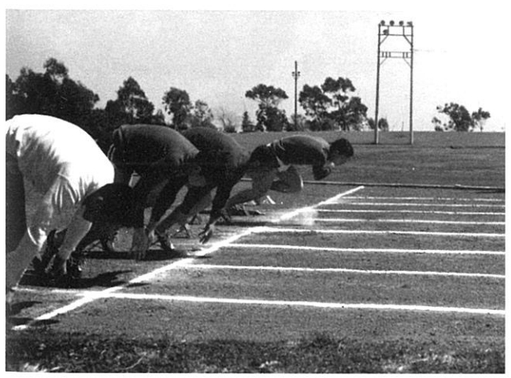

残念ながら棒高跳びは最低ラインの３mを跳べずに得点ゼロ、残り９種目の合計得点で11人中５位という結果でしたが、今でも十種競技をやったという経験は私の誇りです。

第３の挑戦は箱根駅伝予選すなわち20kmへの挑戦です。

４年時の部の目標のもう一つが出場枠の多い記念大会時の「箱根駅伝予選突破」でした。関東インカレの後、高跳びで神奈川県選手権、関東選手権と調子を上げ、自己ベスト更新をねらって全日本インカレを目標にしておりました。サブキャップの岩田も11秒突破を目標に調子を上げている時期でした。ところが長距離パートでは箱根の予選会を走るメンバーが足りないという深刻な状況になっていました。そこで出した結論は「個人記録よりも陸上部としての年度目標の追求を優先する」という事でした。18期即ち４年生は７人ですが、マネージャーの木津を除き、短距離の岩田、400mHの矢野、競歩の木藤、長距離の長谷川と長浜そして私を含めた６人が予選会目指して20kmに挑戦する事になりました。約２ヶ月近くあったと思いますが長距離パートで練習を重ね、我々６人も長距離の後輩と共に予選会に出場しました。予選会当日の私は２ヶ月に及ぶ練習で精根尽き果て、責任を果たす事ができないまま箱根駅伝予選への挑戦は終わりました。残念ながら予選突破はかないませんでしたが、悔いのない貴重な思い出です。

キャプテンとして「陸上競技は個人競技ではなく団体競技である」との信念のもと、同期と一丸となって努力した４年の時が記憶の密度が濃く最も印象に残っています。







# 回　想

19期　平野　均

大晦日に降った雪がうそのように穏やかな天気の続いた2005年のお正月も、元日は初詣、2日、3日はTVの箱根駅伝の観戦といったいつものパターンで過ぎてゆきました。このところの箱根駅伝の人気は大変なものですね。我々、19期生が小原台で走っていた頃は、箱根駅伝がTVで実況中継されるなど夢にも思いませんでした。おかげで、レベルがどんどんあがり、最近ではなかなか本戦に出るのは容易なことではなくなってきたようです。

私は、短距離パートでしたので応援しかできませんでしたが、あのころも長距離陣は箱根をめざし、毎日練習を繰り返していました。どんどんタイムがあがり、参加校も徐々に増えてくる中、なんとか箱根で走ろうと、スピードをつけるためのインターバル練習など、当時としては工夫を凝らした、ハードな練習をしたり、正月休み返上で、箱根まで出かけ、実際のレースの雰囲気を感じ取って意識を高揚させたり、できるかぎりの努力をしていたように思います。

また、当時は、長距離主体の陸上部から、全パートに渡り、総合的に戦力をもったチームとなってきた頃ではなかったかと思います。関東理工系大会にも本格的に参加し、優勝したりもしていました。といってもこれは諸先輩の築かれた伝統の上に積み上げられたもので、特に私たち19期生が1年生で入校した頃からの先輩のなかには関東ICで優勝し、国立競技場に校旗を掲げられた方もおられ、このような活躍の影響が大きかったと思います。

今年の箱根駅伝では、当時聞いたことのないような学校も活躍していました。後輩諸官がいつの日か、また箱根を走ってくれることを願ってやみません。









# 我ら20期の青春回想

20期　加藤市治

我々20期生は、輝かしい成果を収めた17期生のもとに小原台のグランドでクラブ活動を開始いたしました。

三井部長、井坂監督、八尾コーチのもと猪瀬OB、河相・後藤OB・小野寺・川畑・山根OBの献身な援助（指導及びマイクロバスの操縦手）を受け、18期・19期の背中を見ながら「短距離の星」吉村、「走る機関車」木村、「走る貴公子」田島、「短足のロングジャンパー」加藤、「走るカモシカ」森下、「筋肉マンの長距離ランナー」山本、「マメタンク」甲斐、「歩くチータ」宮島、「ミックス（長距離・競歩）」盛田、「長距離・知的なマネージャー」安田の10名は小原台のグランドで青春を謳歌しました。

当然の如く、国立競技場での関東インカレ（1・2年当時は予選会で参加したが）決勝出場を目標に日夜練成し、宮島が競歩で優勝・森下は800mで7位と輝かしい成果を獲得するとともに、関東理工系大会では4年間の練習成果を遺憾なく発揮し総合優勝を果たすことができました。（いまでも、優勝及び防大新記録がかかった400mリレー決勝で加藤がバトンを落としたことは忘れていません。吉村・木村・田島すまない。）

また、長野志賀高原・八戸・福島等での淡い恋などもあった春・夏の合宿、4年時の春の加藤のわがまま「伊豆下田」での温泉合宿の思い出、長年の夢「箱根駅伝」出場を目指した予選会での奮闘（10位との記憶）、短距離部門も参加した青梅マラソン等昨日の如く思い浮かんできます。

それほど、充実した楽しいクラブ活動だったと記憶しています。

また、部誌「走・跳・投・歩」の創刊時に在籍した関係で歴代10傑を作成する作業をしましたが、如何せん防大記録以外はほとんど記録が残っておらず、先輩からの資料提供をお願いする一方、現役はあらゆる努力（幅広く記録会等に参加し10傑を埋める）をしたことが思い浮かんできます。今は、同期の記録が残っている部誌を見て当時を懐かしんでおります。

20期、退官する前に一同に会する場を考えておりますので、その時は優先度1番での参会をお願いして当時の回想とします。







